

# 近江国得珍保今堀郷の「惣」覚書

——金本正之氏の所論をめぐって——

仲村 研

## 目次

はじめに

一 神田畠納帳の史料の限界について

1 今堀郷の耕地面積

2 神田畠の性格

二 今堀郷商人交名について

三 今堀郷の宮座

1 宮座の確立

2 座公事の内容

3 永正期の宮座

おわりに

はじめに

近江国蒲生郡得珍保今堀郷は、周知のように、中世後期の村落と商業とを問題とするには格好の舞台とみなされてきた。それは今堀の日吉神社が保管する、いわゆる今堀日吉神社文書の質量の豊富なことによる。したがっ

て、大正末期『近江蒲生郡志』全一〇巻に、今堀日吉神社文書が紹介されてこのかた、この文書による研究はかなりの数にのぼっている。とりわけ、戦後の研究はごく最近の研究をも含めて、そのほとんどが、村落構造と中世商業との有機的関係を究明することに特徴をもっている。これら諸先学の業績の多くは、停滞ぎみの中世商業史研究を促した点で評価できるが、無媒介に村落構造を商業の展開と連結せしめたため、とくに村落構造の分析に無理が生じてきた。すなわち、脇田晴子氏が「中世商業の展開―近江の場合―」（同氏著『日本中世商業発達史の研究』所収、一九六九年。この論文は原題「中世商業の展開―今堀日吉神社文書を中心に―」△『日本史研究』第五一号一九六〇年Vで、これに若干の補論が付加されている。）で指摘されたように、今堀日吉神社文書のもつ史料性格（限界性）を考慮せずに分析を急ぐという方法上の欠陥である。この決定的ともいべき欠陥は、戦後の研究、とりわけ熊田亨氏の研究以降に存在したのであるが、これら先学の意図する中世村落と商業との構造的連関の究明という問題意識と、その意識をふまえて設定された視角は基本的には正しいと考えられる。この点は、戦後の中世村落の研究と中世商業の研究の中で、今堀郷を素材として到達した水準として評価すべきであろう。この水準に立脚し、方法上の欠陥を克服し、諸先学が培ってきた問題意識を深化せしめるために採用すべきひとつの方法は、今堀研究に従来比較的軽視されてきた宮座関係史料の検討を通じて、今堀郷の村落構造の骨格を抽出することである。中世村落における宮座が、村落像の構造的な投影であることは明らかであり、今後の今堀研究はこの点に留意して、宮座の分析を媒介とする村落構造の究明という方法を採用すべきであると考ええる。

さて、商業史の視角からであれ、村落構造の解明という立場からであれ、今堀郷をその対象に選ぶかぎり、二つの労作を踏まえないわけにはいかない。すなわち、ひとつには前掲の脇田晴子氏の論文であり、ふたつには

金本正之氏の「中世後期に於ける近江の農村——得珍保今堀郷の歴史——」（宝月圭吾先生還暦記念会編『日本社会経済史研究 中世編』所収、一九六七年）である。この二論文を取上げた理由は、前者が今堀日吉神社文書を素材とした中世商業にかんする代表的な論文であり、たんに商業の問題のみならず、この文書のもつ史料性格を指摘した点で、小論を進める出発点となっているのであり、後者の金本論文は、氏の二つのノート（「中世今堀郷に関する、史林・黒川論文を評す」「中世の窓」七号、一九六〇年、「中世近江商人の性格——得珍保今堀商人の分析」「史学雑誌」第七〇編八号、一九六一年）を基礎に構成され、精緻をきわめたもので、今堀郷の村落構造の分析に重点をおいた論稿である。私の今堀郷にたいする主な関心は金本氏と同じく村落構造にあり、そのため金本氏の所論に導かれるところ大である。しかし、金本氏は脇田氏の提起された、今堀日吉神社文書の神田納帳のもつ史料性格について、深い顧慮を払うことなく論を展開されているのであり、恐らく今後今堀郷を研究の対象とする後進のとまどいの因となると思われるので、この点、氏の所論について私見を述べ、そのなかで今堀郷の惣結合のもつ特徴を指摘してゆきたい。

（一）熊田享「自由市場の成立について——中世末期東近江の農村構造——」（『史学雑誌』第五九編第四号、一九五〇年）

なお、得珍保今堀郷の研究史については、脇田論文の座的特権・独占の分析に批判を試みられた佐々木銀弥氏の「中世座商人の独占について——保内座商人の場合——」（宝月圭吾先生還暦記念会編『日本社会経済史研究 中世編』所収、一九六七年）に詳しいので、ここでは省略する。

## 一 神田畠納帳の史料限界について

今堀日吉神社文書六三〇点余<sup>(1)</sup>のうちには、建武二年（一二三五）の今堀神畠算用状から永禄九年（一五六六）の今堀十禅師田畠年貢目録帳にいたる二世紀余にわたって、三〇点の神田畠納帳がある。この納帳は、中世後期の

今堀郷における十禅師社と、如法経道場、庵室、薬師堂、地藏堂そのほか山神、野神、百万遍、弓講などの講、それに宮座における頭役などに付属する田畠からの收納の記録である。この納帳の史料的人格について最初に言及したのは脇田晴子氏であつた。氏は次のようにいう。<sup>(2)</sup>

今堀神田というものは、山門領というような荘園制的領主権をもつ領地ではなく、「今堀惣神田納帳」の名の示す如く、今堀惣の管轄下にあるもので、山門領主によつて認められた免田と、寄進、売得による加地子名主的得分を有する土地とから成り立っている。それ故に、山門に対して貢納義務を有する土地と、有さない土地があり、神田中、一筆一筆、その権利義務の性格が異なっていたと見るべきである。また、寄進買得によつた神田は、今堀郷内に限らず、近在他郷にも散在しており、かかる神田の性格から考えて、貢納義務者＝作人が、何らかの階層を示すものとは考えられないし、得点を請負っているという意味を出ないのは当然のことである。

このように主張された氏は、加えて「神田は今堀郷内の田畠の一部分を占めるにすぎない」とされ、これらの納帳の分析によつては在地構造の究明は不可能であることを主張され、熊田亨、佐々木銀弥両氏の納帳の分析<sup>(3)</sup>に疑問を投げられた。この論文発表直後に黒川正宏、金本正之両氏のノート<sup>(4)</sup>が発表されたのであるが、両氏とも納帳の分析については、脇田氏の批判の対象になる。

脇田氏の今堀日吉神社文書の神田納帳にかんする見解が発表されてから一〇年近くの歳月が経過したが、その間、納帳の分析により今堀の在地構造を明らかにするという意図の論文は、私の知る限り一昨年金本氏が発表された前掲論文「中世後期に於ける近江の農村——得珍保今堀郷の歴史——」が最新のものだと思う。金本氏はこの論文の冒頭において、脇田氏に反論して、納帳類の「史料的价值」を再確認し、脇田氏の主張と「全く異なつた見

通しの上に立つて」所論を展開する立場を明確にされた。この点について第三者である私から見ると、金本氏の誤解があるように思える。すなわち、脇田氏は納帳類が定量分析の対象とならないと主張されているのであつて、けつして、定量分析以外の「史料価値」を否定しているのではない。このことは脇田氏も新しく付された補論の中で触れられているところであるが、両氏の間では、今堀全耕地と神田畠との比率の問題、神田畠の作人の問題について多少のズレがあるように思えるので、私見を述べてみたい。

# 1 今堀郷の耕地面積

脇田氏は今堀神田が、郷内で占める比率を検討するために、天正一九年（一五九二）八月の今堀村指出伏案（改<sup>29</sup>一四五六）から今堀郷の惣高五二六石四斗二升三合を引き出し、その三分の一に当る畠方一七五石二斗五升二合が、同年の得珍保中野村検地帳の畠方石高と面積から、二五町七反の面積と算出され、田方二六四石六升二合に相当する面積はわからぬまでも、寛正四年（一四六三）の神田総数が八町三反余であり、しかもその中には他郷の耕地も入っており、これらのことから「全く、神田は今堀郷内の田畠の一部分を占めているにすぎない<sup>30</sup>」と断定された。これにたいし、金本氏は昭和三四年現在の今堀郷の地積を、水田三三町八反、畠地三町、山林原野二六町三反、宅地三町八反の計六六町九反（氏の滋賀県八日市市役所調査にもとづく）とし、ここから天正一九年の指出の五二六石四斗二升三合に照応する六三町<sup>31</sup>歩は、中世末期の今堀郷には過大な地積であるとされた。そして天正一二年（一五八四）九月一日の指出に二六〇石八斗四升八合とあり、また翌一三年の指出断簡に二八八石四升七合とあるところから、金本氏は次のようにいう<sup>32</sup>。

結局、天正十二―三年の総石高は、二六〇石〇二八八石程であり、それに対して天正十九年が五二六石程となり、この差は、兩年の検地方針の強弱によるものとするのは無い。そうすると、天正十九年の五二六石を地積に換算した値が実状（実面積）に合わない理由も想察されるのである。

しかし、今堀郷の天正の地積（田畠）が実際に如何程であったか。それは現在の三六町八反を下廻ることは確実としても、それ以上の詳しいことはわからない。

但し、今堀の北隣り今在家（今崎町）の耕地面積が天正十一年に廿四町・〇・〇・三二歩で、現在は三〇町八反であるという。その割合を移せば、今堀の天正に於ける耕作面積は二八町六反八畝となろう。そして中世は、なおそれよりも縮小された値であると考えるべきであろう。

寛正の納帳の八町三反歩は、だから当時の総耕地面積の三分の一位には当たっていたのではないかと想像され、それが総耕地の一部分であるにしても、決して軽視出来ない広さではないかと思われる。

右の金本氏の引用文のうち、今在家の天正一一年の耕地面積と現在のその比率で、今堀の現在の耕地面積から天正のそれを推算するあたり、飛躍した計算であると思う。それはさておき、天正一二、一三年の石高と同一九年との差が「検地方針の強弱による」とし、一九年の五二六石余を「実状に合わない」とされるのには強い疑問を差挟まざるをえない。

まず「検地方針の強弱」について今堀日吉神社文書のうち検地関係史料を検討すると、金本氏の見解は訂正を要求されることになる。

〔A〕 今堀村指出案（改29―4 四五八）

蒲生上郡保内今堀村指出之事

高頭伍百四拾石九斗五升七合内

貳百六拾石内 荒斗代違さを違  
川成共加而 平井金十郎殿分

残而貳百八拾石九斗五升七合先御給人田中兵部大夫殿

拾八石五斗六升 定荒

貳石六斗五升二合 斗代さを違

貳百五拾九石七斗四升五合内

右畠分者 大豆

參石 上郷ヨリこい水分

貳石 御宿給

壹石 定使給

六斗 川ほりニ御使物

右書付を上申上候、聊私曲隱田於在之者、何様ニも可被成御成敗候、仍状如件、

天正拾八年九月十七日

政所

左衛門二郎

介一

佐藤隱岐守様

古田肥前守様

森嶋宗寧様

浅野源八様

観音寺様

進上 跡書也

〔B〕 今堀村指出案（改29―10 四六四）

蒲生上郡方内今堀村指出之事

（保）  
御給人田中兵部大夫殿分

大高貳百八拾二石二斗一升

石九斗五升七合内

拾八石五斗六升

定荒

貳石六斗五升二合

斗代さを違

貳百五十九石七斗四升五合

毛付分

右之畠分者 大豆 そは ひへ

蒲生郡五人御代官様 進上

此外

荒さをちかい川成加テ 合貳百六十石

（姓）  
御小性衆人平井金十郎殿



説 [C] 今堀村指出案（前欠）（改29—6 四六〇）

論

二反 宮林毛少 壹石一斗 定荒

米分 以上 百七拾貳石五斗四升三合三夕

大豆分以上 八拾九石九斗七升一合五夕

斗代さを違 貳石六斗五升二合

定荒 以上 拾八石五斗六升

右惣ツ合 貳百八拾參石七斗貳升六合七夕

右書付進上仕候上者、聊私曲隱田於有之者、何様にも可被成御成敗候、仍請狀如件、

佐藤隱岐守様 進上

此分の御帳へ書付上申候、

天正拾八年九月廿六日

右に掲げた史料のうちBは、Aに「先御給人田中兵部大夫殿」とあるのが「御給人田中兵部大夫殿分」とあるところから、天正一八年九月一七日以前のさして遠くない時点のものだと推察される。そしてA・B・Cともに定荒分の一八石五斗六升と斗代棹違分二石六斗五升二合が一致するから、Bは天正一八年としていいだろう。

これらの三点の史料から、検地段階の今堀村は御小姓衆人平井金十郎<sup>(8)</sup>の給地と、御給人田中兵部大夫の給地に二分されたことが明らかになるとともに、A・B・Cはすべて田中兵部大夫の給分について記されたものであることが判明する。このような二人の給人による今堀村の知行は、検地施行の当初から行なわれたと考えられる<sup>(9)</sup>。

このように考えてみると、金本氏が天正一二、一三年の今堀村の総石高を二六〇石ないし二八八石余としたのは、実は二人の給人の給地の各々の石高を表示するものであつて、その和が今堀村の総石高となり、天正一二、一三年と同一九年との石高の差を「検地方針の強弱による」とする金本氏の所論は見当違いとしなければならぬ。すなわち、天正一九年の五二六石四斗二升三合は両給地を合わせたものであると考えられる。

次に右にみた今堀村の検地時の耕地面積であるが、これを知る史料が見当らぬため、脇田氏も金本氏も中野郷との比較において推察されているわけであるが、今堀日吉神社文書の中には未整理の文書がまだ多数存在する。その多くは近世史料であるが、中世史料も若干あり、その中に耕地面積を記したものである。それは筆蹟からいって検地時ないしは、さほど遠くない時点のものと推定される。<sup>10)</sup>次に紹介するのがそれである。

上田分十六町四段二畝

そノ代米二百廿九石八斗八升か

中田分八町二畝

その代米

百石二斗五升

下田分

一町四段半四分

十五石八斗六升

米ツ合三百五十六石

上分

畠分九町七段七畝十一分

七十八石一斗六升

中

十二町九畝廿九分

八十五石四斗

下三町八段六畝

廿三石一斗六升

なちや敷分反

二町八町六畝

三十四石三斗二升

惣々五百六十七石三升か

これによると今堀村は、田は二五町八反九畝四歩、畠・屋敷は二八町五反九畝一〇歩、合計五四町四反八畝一四歩で、その石高は五六七石三升である。これは天正一八年の約五五〇石と一七石余の差はあるが、年々の指出にこの程度の差があつても、年荒や検地施行にたいする鬭争などの条件を考慮に入れば不自然ではない。そして近世において今堀村は寛永から明治初年に至るまで五〇六石余に固定されている。そこで不可解なのは、金本氏が八日市市役所の調査として引用された昭和三四年の今堀の土地利用面積である。先に紹介した検地直後と推定される今堀村の田・畠・屋敷の面積と、明治一一、一二年の調査によるものと金本氏の調査とを比較するため、これを表示しよう(次頁)。

検地時に比して明治初年に水田が増加し、畠が減少しているのは、近世を通じて今堀村民が畠を水田化した努力の結果であろう。それにしても、昭和三四年に至る過程における水田の激減は、耕地整理、道路の拡大、何ら

近江国得珍保今堀郷の「惣」覚書（仲村）

今堀村田・畑・屋敷地積表

	田	畑	屋 敷	計
検 地 時	25町8反9畝4歩	25町7反3畝10歩	2町8反6畝 歩	54町4反8畝14歩
明治11年	51. 3. 7. 27	4. 6. 6. 26	2. 7. 3. 26	58. 7. 8. 19
昭和34年	33. 8	3	3. 8	40. 6

かの事由による耕地放棄等が考えられるが、それは今後の調査課題として、少なくとも今堀村の田畑屋敷の面積は、明治初年で約五八町八反であり、検地時で五四町余であったことは明らかになった。したがって、金本氏が寛正の神田納帳の八町四反余のうち、他郷に存在する神田を差引いた七町五反余と、金本氏の行なったように、検地時耕地面積との比率を求めると、ほぼ一对七になり、数値の上からいつて説得性のきわめて弱いものとなる。もちろん、寛正と検地時とは一二〇年ないし一三〇年の隔りがあり、脇田氏の指摘されるように、中世と近世との耕地形態の質的な違いが問題になるが、いま金本氏の作業通りに運べば、右のような結論に帰着せざるをえないのである。

## 2 神田畠の性格

先に引用したように、脇田氏は、神田が「山門領主によつて認められた免田と、寄進、売得による加地子名主的得分を有する土地とから成立っている」ため、各筆の権利、義務の性格が異なり、作人は得分の請負人にすぎず、請負の面積、貢納額は階層を示すものではないことを指摘された。この点を金本氏はまったく無視して論を進められているのは、今堀研究を志す者として合点がゆかない。ただし、金本氏はさすがに神田納帳の数量的分析は差控えられたようであるが、その代り、年代順に納帳を並べて、作人＝請負人の名前が連続（血縁相続を含めて）しているか否かを調査し、また「文明以降

の一〇年」「応永―寛正―文明」「延徳・明応―永正」の各期の階層変化を検討して、「急激な或いは顕著な農村構造の変化などということは少くも十五世紀末葉―十六世紀初頭にかけて起り得なかった<sup>(16)</sup>」と結論づけられる。金本氏のいわれるように、神田納帳の作人が「今堀惣の全構成メンバーを網羅して<sup>(17)</sup>」いるとしても、その作人の名前が納帳に連続するからといって、階層変動がない（作人の名前消滅―作人の没落という論理になる）というのは、やはりおかしい。極端な例では、領主側の土地台帳においてその占有に変動があつても、神田納帳には名前が存続する場合もありうることである。まして況んや、作人の神田畠にたいする権利、義務の内容が異なるのに、名前の存続の総和でもつて階層変動を云々する方法には疑問を差挟まざるをえない。しかも、その立論の基礎が「宮座の成員―神田農民である<sup>(18)</sup>」とされるに至つては到底納得できない。詳細は後節で論じるにして、簡単にいえば、神田農民の中には金本氏もご承知のごとく、若干ではあるが他郷の農民も入っているのであつて、たとえ少数であれ、他郷農民が今堀十禅師社の宮座成員であることの論証がなければ、氏の説は崩壊することになる。

- (1) 昭和十六年一〇月、京都帝国大学文学部国史研究室が作成した「滋賀県蒲生郡中野村今堀村社日吉神社文書目録」によれば、改番号から改四一号、後発見一号から後発見五号まで全六二五通の文書が数えられる。しかし、そのうち改三六号から改四〇号に含まれる神田納帳は合冊を一点として数えているため、全六三七通の文書にのぼる。原本もこの目録順に綴じられているので、本稿での文書の表示は原則として目録に従うことにした。ただし、目録には通し番号がないので、これも付すことにした。現在、文化史学会の雑誌「文化史学」には三品彰英氏の編で、通し番号四一三号まで出されているが、本稿ではそれを考え合わせ、次のように表記する。たとえば永正一〇年一月四日の東若兵衛田地寄進状は改二八号三通目で通し番号は四二二号であるから（改28―3 四二二）というように表記したい。なお、本稿で使用する今堀日吉神社文書は昭和三年当時同志社大学文学部教授であつた三品彰英氏が今堀より借用された原本を写真にとつたものであり、その中には後で紹介する未整理の文書も含まれている。
- (2) 脇田晴子「中世商業の展開―近江の場合―」（同氏著『日本中世商業発達史の研究』所収 五三四ページ）。
- (3) 熊田享 前掲論文、佐々木銀弥氏の諸論文のうちで「荘園制末期の土地帳簿の変化と農村構造」（『経済学季報』九号 一九五四年）、「保

内商人の土地所有と商業」（『経済学季報』二〇号 一九五八年）がその代表的なものである。

- (4) 黒川正宏「中世今堀郷の農民構造と延暦寺」（『史林』第四三巻第五号 一九六〇年）、金本正之「中世近江商人の性格——得珍保今堀商人の分析——」（『史学雑誌』第七〇編八号 一九六一年）。

- (5) 脇田晴子 前掲書 五三五ページ。

- (6) この計算については脇田氏の批判がある（前掲書 五九三ページの注6）。

- (7) 金本正之「中世後期に於ける近江の農村」（『日本社会経済史研究 中世論』二五〇・二五一ページ）。

なお、金本氏はこの文について次のような注を付している。すなわち「寛正の納帳は筆者は八町四反二六歩と計算した。又、脇田氏は、『近在他郷のものも相当入っている』といわれるが、筆者の計算では、他郷の地と思われる可能性のある土地は、今在家五反一六二歩、柴原一反一八〇歩、蛸溝一反三〇〇歩、の計八反二八二歩であった。約一割程度であって、これを差引いても、在今堀の土地は七町五反三〇四歩ある。他郷の地というのは左程問題にならない。（前掲書 二九六ページ）と他郷に存在する神田畠の地積が僅少なることを指摘し、神田納帳の効用を主張される。

- (8) 天正二〇年三月一八日 今堀村家数注文（改2—5 八）には、小一なる者が「平井金十郎殿へはうかう人」とされており、平井金十郎は村内に一人の被官をもっていることがわかる。

- (9) 天正一二年一二月二日の検地にかんする今堀惣分定書（改29—15 四六九）三カ条のひとつに、「両御給人の惣たかのツ合あい申候やうにと御事ハリ可申上候」とあって、「両御給人」が平井金十郎、田中兵部大夫の二人であるか否か不明ながら、検地当初より二人の給人が今堀村に臨んでいたことは明らかである。

- (10) 今堀村田畠の地積とその石高を記した文書と次に紹介する文書と同一筆蹟であるため、検地時のものと考えて誤りない。

金十郎殿分

そは廿四石六斗九升五合

米分百六十七石五斗五合

米 百七十石四斗七升

(附之)

大ツ廿十石六斗三升五合

そは廿五石四斗九升五合

ひへ卅五石八斗四升

荒 七石三斗一升五合

右惣の高 貳百五十九(石)八斗一升五合か

なお「金十郎殿分」とは平井金十郎殿分のことである。

(11) 天正二年霜月一三日に今堀惣分は、連署して次の三カ条を定めている。

一めん間之事

一十四反せに之事

一升計とりの事

右三ヶちやう、せせうかなわさるゝおいてハ、一とう二いゑをあげ御事ハリ可申候者也、

と置目をしているが、この条目は、免相すなわち年貢率、年段錢、収納外についての訴訟であると思う。また検地反対闘争で支配者に譲歩を余儀なくさせているのは次の史料(改29—9 四六三)で明らかである。

今度江洲検地出来之百姓等、過半令逃散之由候、如何之子細候哉、然者去年物成未進分儀、只今令

納所事、於難成者、来秋まで借遣候間、悉召置、荒地以下をも令開作候様ニ念を入可申付事専用候也、

三月十九日

秀吉御朱印

宮木長次殿

森 兵吉殿

(12) 『滋賀県市町村沿革史』第三卷三八一ページ。寛永十一年(一六三四)、元禄一四年(一七〇二)、天保八年(一八三七)、明治元年(一八

六八)の石高はすべて五〇六石余であり、この石高は近世を通じて固定化している。

(13) 金本正之 前掲論文 二四八ページ。

(14) 滋賀県物産誌 卷之五『滋賀県市町村沿革史』第五卷 資料編一 四〇七ページ。

(15) 脇田晴子 前掲書 五九三ページの注6。

(16) (17) (18) 金本正之 前掲論文 二八五ページ、二五三ページ、二五三ページ。

## 二 今堀郷商人交名について

金本氏は「中世後期に於ける近江の農村」に先立つて「中世近江商人の性格——得珍保今堀商人の分析——」を発表されたが、そこでは従来の今堀研究で看過されてきた、年未詳「保内今堀郷商人交名」（後3—1 五九九）を取上げ、その年代を確定し、そこに記載された商人の交名から、若干の商人を抽出して、神田納帳等により、その階層を究明し、今堀商人の農民的性格を指摘された。ただ、神田納帳の使用については、脇田氏の指摘や前節に記した理由から首肯しがたいが、納帳以外の史料からも多角的な検討を試みておられるので、その結論には賛成したい。

ところで、金本氏は個々の商人の階層規定を行なうためには、どうしても年未詳の「商人交名」の年代を割出す必要がある、仔細な検討を加えた結果、寛正期のものなることを「断定」され、時を同じくして発表された黒川正宏氏の享徳期説を否定された。金本氏と黒川氏との年代測定の差異はわずか一〇年前後であるが、この交名は今堀郷の村落構造および商業の特質を究明する上での重要な手懸りであり、年代の確定は今後の今堀研究に決定的影響を与えると考えられるので、若干の私見を述べておきたい。

まず問題の「商人交名」を紹介しよう。

[D]

保内今堀郷之商人之数

道信坊

東(刑部)  
形P太郎

彦太郎

東  
馬太郎



イシ 左近太郎	イヌホケン 馬太郎	小法師 左近三郎	平二郎
馬殿	松法師 左近太郎	西 形P太郎	太夫、 衛門
トラ 左近二郎	道音 イヌ	ハツ 左近、	サカヤ 馬太郎
太初 左近太郎	コマ 衛門二郎	兵衛太郎	茶ヤ 馬太郎
馬二一郎	馬四郎	左近太郎	子、 左近太郎
大黒 衛門	衛門三郎	ヤブ 左近二郎	宮内太郎
尺 衛門二一郎	若 衛門、	ハツ太郎 左近、	イヌ 衛門太郎
衛門四郎	弥二郎		

金本氏は右のDの年代を割出すのに、まず至徳元年（二三八四）の今堀郷神畠坪付から永禄九年（一五六六）の今堀郷十禅師田畠年貢目録帳に至る二五点の神田畠納帳を、年代ごとに一三のグループに分け、各グループの納帳記載の人名を「商人交名」三四人に照合した結果を左記のような表にまとめられた。そして寛正期が他の一二のグループに比して圧倒的に多いため寛正期と断定されたのである。寛正期のグループは寛正四年（二四六三）の今堀神田納日記と同五年の納帳であり、これらの納帳とDとの合致する人名一三人とは、

道信坊	東刑部太郎	イシ左近太郎	平二郎	西刑部太郎	太夫	ハツ左近	茶ヤ馬太郎	馬二一郎	馬四郎	トラ左近太郎
尺衛門二一郎	若衛門									

であるという。そして一三人のうち、平二郎、茶ヤ馬太郎、ハツ左近、トラ左近太郎の四人は、寛正期以外の納帳には記載されず、寛正期独自の人名だとし、この断定の誤りないことを強調するとともに、道信坊について他

時 期	含有数	三四名に 対する割合
1 至徳期	二名	六%
2 応永期	四名	一三%
3 嘉吉期	五名	一五%
4 寛正期	一三名	三八%
5 文明期	四名	一二%
6 文明—長享期	五名	一五%
7 延徳期	八名	二四%
8 明応期(一)	五名	一五%
9 明応期(二)	五名	一五%
10 永正期	一名	三%
11 天文期	〇名	—
12 永禄期(一)	〇名	—
13 永禄期(二)	四名	一二%

金本正之「中世近江商人の性格」より引用。

の納帳での道心坊と異名同人と考へて、「他の時期では悉く道心坊と書き表すのに寛正期のみ道信<sup>⑥</sup>坊の文字を使用する事を注意すべく、従つて道信坊も亦この寛正期に特有な名前として考へる事が出来る」と補注を加へて寛正期説をより強化されたのである。

Dを寛正期と断定されるに至る金本氏の作業についての疑問は、前節でふれた最近の論文「中世後期に於ける近江の農村」の所論との関連での問題である。すなわち、Dを寛正期と割出すために、寛正四、五年の納帳と照合されたわけであるが、三八%しか合致しなかつた。にもかかわらず、右の論文では、「今堀惣神田納帳の性格は、……農民分析の上からは、今堀惣の全構成メンバーを網羅して知り得るところの貴重な史料であるという事を考へなければならぬ」とし、「宮座の成員『神田農民』とされている。納帳が惣の全構成員を記しているなら、この期の三四人の商人は当然全員が納帳にその名を止めていなければならない。しかるに、そうでないのであるから、納帳が金本氏の指摘されるような「今堀惣の全構成メンバーを網羅して」いないか、「断定」を加えた寛正期が間違っているか、そのいずれか、あるいはその両方である。

そこで金本氏が否定された享徳期を再検討してみよう。享徳期説を裏付ける史料は、享徳三年（一四五四）六月の有名な「藤きり山の木こり馬の人数交名」（改24—10 三三九）である。

[E]

(端裏書)

「ふちきりやまの人数帳」

藤きり山の木こり馬の人数

合享徳三年六月 日

馬衆

道金坊

衛門、

衛門二郎

(刑部) 形P太郎

兵衛、

昌法坊

道立坊

兵衛二郎

左近五郎

左近、

左近二郎

道寿坊

左衛門、  
左衛門二郎

正阿弥陀仏

馬殿

太夫、  
左近二郎

平二郎

ハツ

左近二郎

左近三郎

左衛門

サ  
左近三郎

宮内殿

馬太郎

カチノ衆

道信坊

小  
大夫、

形P太郎

ハツ  
左近

茶ヤ  
馬太郎

サル

衛門三郎

コホウシ  
左近二郎

大コク  
衛門

尺  
衛門二郎

コハツ  
宮内太郎

イシマツ

衛門太郎

ハツ太郎  
左近、

右此人数者、此山へ末代立へき者也、此外者酒手おかへらす候間、末代立ましき者也、

人数等(花押)

この「藤きり山」というのは藤切山であり、金本氏もすでに指摘しているように、伊勢越千草峠へ向う交通の要衝甲津畑にある。『近江蒲生郡志』によれば、千草街道甲津畑の坂路の麓に鎮座する藤切神社の背後に山があり、黒藤（藤蔓か）の産地だという。応永二八年（一四二二）三月二十八日の「藤切大明神造立奉加」によると、甲津畑は個人や近在の郷々の奉加を得るとともに「南山」「北山」の木を売却して造営費を捻出しているが、今堀郷が藤切山へ集団で伐採・搬送に出向くのも、今堀が藤切山の山林を購入する形をとったと推測され、今堀郷人のうちでこれに参加するのは、酒手を負担する者のみに限られたのである。ここで問題になるのは、このEが二人の「馬衆」と二人の「カチノ衆」に区別されていることであるが、これは後節でふれるとして、「商人交名」の年代割出しに焦点をあて、このEを検討しよう。

まず、金本氏が寛正期以外の納帳にその名を見せないとされた四人のうち、平二郎、茶ヤ馬太郎、ハツ左近の三人は、享徳の「人数交名」に記されているし、つぎに寛正期独自といわれる「道信坊」もここに記されているから、金本氏の寛正期「断定」も揺ぐことになろう。つぎに人名の照合については、金本氏は享徳期説を否定されたのであるが、どうであらうか。いま一度繁をいとわず照合してみよう（次に記す人名はD「商人交名」、「」内は享徳三年のE「人数交名」である）。

道信坊

道信坊

小法師左近三郎

平二郎

馬殿

ハツ左近

茶ヤ馬太郎

大黒衛門

尺衛門二郎

ハツ太郎左近

ハツ左近

馬殿に「モト」Ⅱ元が付されているが、以上九人はほぼ一致すると考えてよい。更にDの三四人のうち、合致しない二五人について検討すると次のようになる。

説

論

弥二郎〔弥二郎左衛門〕 東刑部太郎〔馬衆の刑部太郎かカチノ衆の刑部太郎〕 西刑部太郎〔カチノ衆の刑部太郎か馬衆の刑部太郎〕 東馬太郎かイヌホウシ馬太郎〔馬太郎〕 大夫、〔大夫、左近二郎〕 コマ衛門二郎〔衛門二郎〕 衛門三郎〔サル衛門三郎〕 トラ左近二郎かヤフ左近二郎〔左近二郎〕 宮内太郎〔ハッ宮内太郎〕

残る二五人のうち九人が合致する可能性はきわめて大きいのである。かくして、Dの三四人のうち一八人が一致するとなれば、享徳期説に近接せざるをえないのである。

その享徳期説をより確実にするために絶好の史料がある。それは「人数交名」より一年余以前の享徳二年（四五二）卯月二二日の「鹿々垣之日記」（改17—3 二五九、改19—4 二八九）である。それを紹介しよう。

[F]

鹿々垣之日記事 (通)

一番	一番	二番	西	三番	三番
一丁ハ	衛門二郎	一丁ハ	左衛門、	三丁ハ	衛門四郎衛門
四番	上小同兵太郎	一番	さる	六番	こま
二丁ハ	太夫	一丁ハ	衛門三郎	丁ハ	衛門二郎
七番	北右馬太郎	八番	弥二郎	九番	道金、
二丁ハ	しやく	二丁	左衛門	二丁ハ	東
十番	南衛門二郎	十番	さる	十二番	ひこ太郎
一丁ハ	ツ衛門太郎	一丁ハ	衛門三郎	一丁ハ	
十三番	西	(木戸)	きとさわまで十九番	三番	
一丁ハ	衛門四郎	二番	大	一丁ハ	こうや
一番	大ハツ	二丁ハ	太夫	六番	
一丁ハ	左近太郎	一番	やふ	四丁ハ	兵衛太郎
四番	中坊	一丁ハ	左近二郎		

近江国得珍保今堀郷の「惣」覚書（仲村）

七番 三丁ハ	正法、	八番 一丁ハ	けつさう 宮内	九番 一丁ハ	ハッ 衛門太郎
十番 一丁ハ	石松 衛門太郎	十二番 二丁ハ	正幸	十二番 一丁ハ	席 左近太郎
十三番 四丁ハ	東 衛門太郎	十四番 二丁ハ	妙道、	十五番 一丁ハ	い上廿五番中きり
二番 二丁ハ	右馬五郎	二番 一丁ハ	藤内太郎	三番 一丁ハ	道寿、
四番 二丁ハ	道信、	五番 一丁ハ	（刑部） 形戸太郎	六番 一丁ハ	道金、
七番 一丁ハ	宮内	八番 三丁ハ	西 左近五郎左近	九番 一丁ハ	道音、
十番 一丁ハ	犬 右馬太郎	十一番 一丁ハ	西 左衛門二郎	十二番 一丁ハ	ッ 衛門太郎
十三番 一丁ハ	大黒衛門二郎	十四番 二丁ハ	西 衛門、	十五番 一丁ハ	道寿
十六番 六丁ハ	道立、	十七番 一丁ハ	西 右馬太郎	十八番 二丁ハ	さる 左近二郎
十九番 一丁ハ	ハッ 左近二郎	廿番 一丁ハ	正阿弥	廿一番 一丁ハ	松井師 左近太郎
廿二番 一丁ハ	ハッ 左近二郎	廿三番 四丁ハ	北 兵衛	廿四番 一丁ハ	北 左近、
廿五番 一丁ハ	中坊	廿六番 一丁ハ	左近三郎	廿七番 一丁ハ	友雲あん
廿八番 一丁ハ	衛門五郎	下きりい上四十二	（丁）		

合い上八十六（丁）定所如件、

享徳二年卯月廿二日

このFの史料は五五人の人名が記されている（ただし、木戸際までの分担の四番二丁は太夫に上小同兵太郎、北右馬太

郎の二人が加わっているが、この番はいちおう太夫に代表させたが、そのうち六人が重複しているので四九人が各番の区域の鹿垣を担当していることになる。この鹿垣はこれがなければ直接被害を蒙る農民が、各々の所有する田畠の所在とその面積によつて分担区域と長さを割付けられたものと考えられる。したがって、分担の長さが、必ずしも郷民の富裕の度を表現するものとは限らない。このFの人名は同年代の「人数交名」とは当然重複する。その数は二〇余人を下らない。ここで問題になるのはDとEの合致数一八人以外の一六人である。それをFと照合すると次のようになる（上段はDの人名で、「」内はそれに合致するFの人名である）。

彦太郎〔栗彦太郎〕 松法師左近太郎〔松法師左近太郎〕 道音イヌ〔道音〕 大初左近太郎〔大初左近太郎〕 兵衛太郎〔兵衛太郎〕  
 トラ左近太郎〔席左近太郎〕 若衛門、〔衛門〕 衛門四郎〔若衛門四郎〕

右の八人が新たに合致し、E・FがDと合致する総計は、三四人のうち二六人に達し、しかも、金本氏が寛正期独自の名前だとされた四人のうち「トラ左近太郎」もFに記されている。つまり、寛正期独自のものとされた道信坊を含む五人の人名がすべて享徳期のE・Fの史料に出ているわけで、金本氏流に表現すると、七六%ほどが合致するのである。加えて金本氏が寛正期説を主張される根拠となり、「今堀惣の全構成メンバー」が記されているはずの納帳の約五〇人とDの三四人を照合して一三人しか合致しないのである。享徳期説はEとFで重複人名を除去して六〇余人（しかもこの数は今堀惣全構成員とは考えられない）のうち二六人が合致する。ここでは比率ではなく二六人という絶対数が物をいうのである。かくして、金本氏が「精査」を加えられたはずの「保内今堀郷商人交名」の年代は、氏が否定されたはずの享徳期の方が有力となったのである。

なお、右に述べた点にかんして若干の補足を加えたい。それはDの「商人交名」についての文書の読み方であ

る。金本氏は「太夫、」「若衛門、」「ハツ太郎左近、」（この他にも「ハツ左近、」があるが、氏はこの「、」を読み落している）の「、」を「殿」と読んでいる。このDで「殿」の文字が記されているのは「馬殿」だけである。ところが、Eの読み方になると、「馬衆二十二名中でも特に馬殿・宮内殿二人だけにク殿の敬称があることも注意される処である」とし、馬衆の「衛門、」「兵衛、」「左近五郎左近、」「左衛門二郎左衛門、」「太夫、左近二郎」の五人と、カチノ衆の「小大夫、」「ハツ太郎左近、」の二人の計七人の「、」を殿と読んでいない。察するに、カチノ衆に「殿」という敬称が付されていると、具合が悪いからであろう。私は、EとFは同一人の筆によると判断するため、「、」が執筆者の意図によつて「殿」とも読めるし、そうでもないという曖昧な形で処理するわけにはゆかない。そこでFの「鹿垣日記」の場合をみると、「道金、」「正法、」「妙道、」「道寿、」「道信、」「道立、」のように法号を称する者と、「北左近、」「西左衛門、」やD・Eにみられるように俗名に「、」が付されている者との二つの用法がある。前者の場合はD・Eの用法から「坊」ないし「房」と読み、後者は「入道」を当てるべきだと考える。後者については金本氏がいみじくも引用した史料で明らかである。後節で検討するが、永正元年（一五〇四）の「座拔日記」（改35—3 五七〇）で五五五文の未進によつて座を除外された若衛門入道は、「商人交名」で「若衛門殿」と称されていると金本氏がいわれるが、この「殿」は「、」であつて「座拔日記」にあるように「入道」とするべきである。確かに若衛門入道は寛正四年（一四六三）二月四日の今堀神田納日記（改38—2 五九〇）では「殿」の敬称が付されているが、その人間がかつて「殿」を付されていたのとは関係なく「、」は「坊」か「入道」を当てるべきである。さすれば、カチノ衆に「、」が付されていて合理的に説明がつくであろう。



- (1) 黒川正宏「中世今堀郷の農民構造と延暦寺」「史料」第四三卷第五号 一一〇ページ。
- (2) 金本正之「中世近江商人の性格」「史学雑誌」第七〇編第八号 七六ページ。
- (3) 金本正之「中世後期に於ける近江の農村」前掲書 二五三ページ。
- (4) 金本氏は「商人交名」三四人のうち一二人が、至徳元年（一三八四）から永祿九年（一五六六）にいたる二五名の神田畠關係文書に名前をあらわさないことについて、「それらは、今堀十禪師の神田畠の作人ではなかったのであろう。」「中世近江商人の性格」七六ページとされた。私はこの商人は全て宮座成員であると考えから、ここからも「宮座の成員＝神田農民」のいう金本氏は自らのシェーマを崩していることになる。
- (5) 金本正之 前掲「史学雑誌」論文 六四ページ。
- (6)(7) 『近江蒲生郡志』卷六 神社志 七三三ページ～七三九ページ。
- (8) 金本正之 前掲「史学雑誌」論文 七二ページ。
- (9) 金本正之「中世後期に於ける近江の農村」前掲書 二八九ページ。金本氏は「先ずこの史料（座抜日記——仲村）に挙げられた一五名は必ずしも零細な農民でない。（中略）殊に寛正の今堀商人交名の史料には『若衛門殿』として敬称つきで現われているのである。」と述べておられる。

### 三 今堀郷の宮座

#### 1 宮座の確立

周知のように、中世今堀郷は、得珍保上六郷、下八郷のうち、下八郷の一郷であり、得珍保は「日吉十禪師彼岸祈所、山上諸講演殿脚」（改13—5 一七二）とされ、比叡山麓坂本の日吉十禪師社の社領で延暦寺東塔東谷仏頂尾の衆徒の支配をうけていた（改1—2 二）。保内各郷には日吉十禪師社が勧請され、山門の郷民支配の接点

となつた。今堀郷ではこれが今堀十禪師社と呼ばれている。そして今堀郷民の惣結合<sup>①</sup>官座が、この十禪師社を拠点に結ばれていることはいうまでもない。

今堀十禪師社の官座の確立は、金本氏によれば、今堀郷における名体制の解体と十禪師社への神田畠の集積とから、応永二〇年代と推定され、具体的な根拠として、官座の掟書のこの時点における整備を指摘されている。この金本氏の設定された視角は正しい。しかし、官座確立の根拠として掲げられた掟書の引用は不正確である。すなわち、応永四年（一二九七）六月の今堀惣中衆議状「G」（改27—14 三八九、応永一〇年（一四〇三）二月の座公事置状「H」（改4—11 三三）、応永一六年（一四〇九）二月一九日の惣分山神田宛状「I」（改32—5 五三）を引用した氏は、Gを「稚拙」な文書、Hを「文意も整わないし、字も極めて拙劣<sup>②</sup>」とし、またIをHと同様として、これら稚拙、文意不明、文字拙劣の文書も応永三二年（一二四五）十一月の今堀郷座主衆議定条々書「J」（改26—3 三六五）に至って、「今堀郷の官座が初めて形式を整えて郷民に布達したもの<sup>③</sup>」と考え、応永一六年のIと応永三二年のJとの間に官座が確立したとされたのである。いまこれらの史料を再吟味しよう。

〔G〕

（端裏書）

「かうこのせうし<sup>（講）</sup>の事」

当承仕ハかうのとう、さるかくのきやうをのそく、こもハかうの一まい、承仕一まいあむへし、たくしよろすうちこのま

いらせたるものをハ、かんぬしなうらうへし、

（直 金）  
（議）  
衆儀如件、  
応永二年六月

[H]

(端裏書)

「置手状」

注進 <sup>(座公事)</sup> サクシノ事、コトコトクサクシヲ出サラム人々者、サエハ入申ヘカラス、

一 明阿弥陀仏 信次郎 五郎二郎 介五郎 九郎二郎 兵衛五郎 彦太郎 馬太郎

<sup>(地下)</sup> チケノ中人、<sup>(間人)</sup> マウトノ人々ニライテハ、<sup>(兄)</sup> ツアニテアリトモ、<sup>(下)</sup> シモノツクヘシ、

一 サクシ一々今ニ出サラム人々ハ、サニ入ヘカラス、

仍為後日沙汰状如件、

応永十年ひつしのとし二月 日

[I]

(端裏書)

「山神ノ田ノ日記」

惣分アテ状之日記事 <sup>(宛)</sup>

合巻石二斗者

右件アセチノク米ハ、<sup>(俣)</sup> 日テリカセソムマユクトモ、此田<sup>(旱風損)</sup>ニ於ハ、一升モ未進有マシクサラウラマシクサウラウ、<sup>(ウラウ)</sup> 若田<sup>(後)</sup>ム錢ハ

<sup>(作人)</sup> サクニムハフムナシ、<sup>(分カ)</sup> 惣ハフナシサラヘシ、<sup>(ム脱カ)</sup> 若夫<sup>(タ脱カ)</sup>ハムフムナシ、<sup>(符カ)</sup>

<sup>(応)</sup> 广永十六年二月十九日

广永十五年夫一人 カクノ夫ニユク

右の G・H・I のうち、H と I は同一人の筆になるものと考えられる。

G は「かうとの」（神殿で神主殿の意か）と承仕（小使・正使<sup>4</sup>）という今堀郷における神事の主導者にかんする規定で、承仕は講頭、猿樂録（改24—26 三五五）の負担を免除されるが、「かうとの」と承仕は正月四日の結鎮の行事に必要な前の蒺は、兩人が各一枚編むことを義務づけられている。そして惣より集められた祭事のための供物（改27—11 三八六）は、神主が直会を行なうというのである。筆致も流麗で意味もよくとれる。およそ「稚拙」とは縁遠い文書であり、「かうとの」の意味が不分明ながら、それは文書の「稚拙」のせいではなく、私を含めて中世村落の祭祀に不案内のせいに帰すべきである。

H も片仮名書に読みずらはあるが、意味はよくわかり、「文意も整わないし、字も極めて拙劣」といえない。すなわち、第一条は、明阿弥陀仏ら八人は地下中人、間人であるため、宮座での座次は一般座衆より三歳年長であつても下座に着席すること、第二条は、冒頭の反復で座公事を完納しない者は宮座に入れないことをいつているのであり、金本氏の理解を疑わざるをえない。

I については、やはり「稚拙」、文意不分明と称されるが検討しよう。この文書の解読が金本氏とは大部異なっている。この文書の稚拙なのは、草案であり、衍字、当字、脱字のあるためであるが、けつして文意のとれない文書ではない。すなわち、I は惣がアセチにある山神田の惣石二斗を作人に宛てたものであり、作人の請負いの条件が規定されている。この山神田の供米惣石二斗は、旱損風損にかかわらず、一升といえども未進があつてはいけない。もし段銭が賦課された時でも、作人はこれを負担せず、惣も負担しない（段銭の対象にならない田である）。もし夫役が賦課された時でも、これを負担しない。しかし、去年応永一五年は、夫一人を出し、その

夫は「カクノ夫」を勤仕したという、過去のこの田についての負担の事実を記しているのである。

以上三点の史料のうち、Iが難解といえは難解であるが、前半の意は明確である。したがって、私は金本氏のこれらの文書についての評価には賛成できない。一步譲つて、これらの文書が稚拙であるとしても、掟書の筆法、表現が稚拙であれば、従来、文字による表現力の劣る人々が、宮座の中軸である老人に進出してきたこと自体に、中世後期村落における宮座の評価を行なうべきであり、かかる観点からしても、金本氏の所論には納得できない。まして、Gより一〇余年以前の永徳三年（一三八三）の結鎮頭日記（改24—28 三五七）、同四年の結鎮頭等人物注文（改24—2 三三一）を「それは単に『けちの頭』に関するごく簡単なものか、或は単なる『人物注文』に過ぎず、体裁も整つてはいない」と無視されるに至つては、金本氏の応永二〇年代宮座確立説にますます不信の意を表明せざるを得なくなってくる。

「J」

（端裏書）

「けちのとうのにき」

定今堀郷家鎮頭事  
（結）

右於新座輩、雖為一度、逐出仕之者、依其座次第、可来頭指之者也、仍衆儀之評定如斯、

永徳三年 关正月 日

又九月九日頭 可准先之、

一 かうか谷の神田九日頭人方可渡之者也、

一左近次郎家鎮頭事、

右於当頭勤仕之者、依非分頭之間、後年廻合時、可立之者也、

永徳三年（勘）正月四日

勤之写

[K]

結鎮頭入物注文

八合并

五升 的帳

一斗 座酒

三升 女房座

一升 さいの神 一升 的前

八升 神供米（ミ）

十三日堂頭事

頭人 二人

酒 四斗

六升 大仏供

九月九日頭事

五升 御水

三斗 座酒

永徳二年正月 日

依衆儀評定所定如件、

右の二点のほかに年未詳の九日頭役さかなノ次第（改24—20 三四九）は、九日頭、堂頭、結鎮頭の行事の着次第を記したものであるが、これは明らかにJ・Kに付属するものとしてよいであろう。かように今堀十禅師社において、頭役について細部にわたる規定が存在するということは、一四世紀の八〇年代である永徳年間にすでに宮座の体制が確固として成立していたこと以外の何ものでもない。Kでなお明らかなように、頭役の行事の次第

は「衆議」によつて決定されているのであつて、この事実によつても宮座の確立は一五世紀初頭「応永二〇年代頃」ではなく、少なくとも一四世紀の八〇年代に溯ることができると思う。

以上みてきた宮座の確立期に関連して、その変質期に惣結合の弛緩の時点について、金本氏の所論に則して検討しよう。氏は萩原龍夫氏の指摘を採用して「永正をすぎる頃から動揺し変貌し」ていったとされた。萩原氏の指摘は、永正一七年（一五二〇）の惣中掟（改26—10 三七二）の第一条に神聖な堂舎での博奕を禁止していること、この掟以降天正一〇年（一五八二）まで弘治二年（一五五六）の掟があるのみで、この事実から「惣結合と神事の厳肅さが失われたと見てよいのではないか」ということである。私も金本氏と同様、萩原氏の考えに大方の賛意を表すものであるが、ただ金本氏が今堀郷における宮座確立の根拠に引用された史料との関連において若干の疑問が残るので、簡単に指摘しておきたい。すなわち、金本氏は応永三二年（一四二五）十一月の今堀郷座主衆議定条々書を引用し、「定期寄合を開いて郷民への布達を定める宮座の体制が応永末に出来上つた」とされた。もちろん、金本氏によれば「稚拙」でなく、「体裁」の整つた史料である。

〔L〕

（端裏書）

「置手扶」

今堀郷座主衆議定条々事

一堂拝殿節私不可立、

一大鼓私不可打、

一堂宮前私物早、勝灰不可行、

一打板私敷不可置、

右於此旨違背輩者、可三百文咎行、猶以任我意人者、末代可被停止座主者也、仍所定如件、

応永三十二年十一月 日

第四条は萩原氏の卓説<sup>(6)</sup>があるので従うとして、問題は第三条である。萩原氏は「強いて読むとすれば、堂舎前に私の物を干し、商売行うべからず、ということになろう」としておられる。私は「勝灰」は「商売」ではなく「勝敗」であると考ええる。勝敗は勝負であり、勝負事すなわち博奕である。したがって、私は第三条を、堂舎の前で勝手に（第一、二、四条から副詞にした方がいい）物を干したり、博奕を行なつてはならない、とする。かく考へるならば、博奕のみを取上げて、金本氏の論理に当てはめると、宮座体制の確立期に「弛緩」の事実が存在することになる（もちろん、博奕の禁制の条項が第一条か第三条かの差異によって禁止の強度の違いはあると思うが）。私は今堀郷のような早くから商品の仲介業を生業の一部としている地域においては、当然貨幣経済に巻き込まれるのが早いと思うし、その結果として郷民の投機欲をあおり、それが堂舎での博奕となつて現出するわけであり、その点で貨幣の流入は郷民に頽廃をもたらず側面をもっている。一四世紀の八〇年代にすでに確立していた宮座には、その意味で確立当初より頽廢の兆候が存在したのであつて、永正期のみの特徴ではないのであるが、それが一般的に顕在化するのが一六世紀初頭であると考ええる。次に一六世紀初頭の今堀郷の状勢を検討しよう。

## 2 座公事の内容



今堀郷において階層分化を指摘する絶好の史料であるとされてきた、永正元年（一五〇四）の座抜日記（改<sup>35</sup>—五七〇）について検討を加え、金本氏は、次の三点を推論された。<sup>(18)</sup> そのまま引用すれば次の如くである。

一、従来、宮座へ入る為の『座公事』が實際何を意味するか分らなかったのであるが、恐らくそれは神田農民として年貢を十禅師社に納めることであつたのであらう。

二、それ故年貢未進の状態によつては座を抜かれる。つまり宮座の成員でもなくなるし、神田農民でもなくなる筈である。

三、この史料で永正元年に座を抜かれた農民は零細農民でも従属農民でもなく、ごく一般的な神田農民であり、中には郷内多数の有力者も交っていた。これらの農民が座抜きも覚悟で相当額の未進をしたのは、経済的な理由——貢納不能＝無力——からとは必ずしも言えず、寧ろ他に何らかの原因があつたのではないか、と思われる。

右の三つの推論を点検するために、まず問題の座抜日記を紹介しよう。

# [M]

立ノ又太郎 <sup>(辰)</sup> 依無力座ヲ拔早

門兵衛 依無力座ヲ拔早

駒二郎 依無力座ヲ拔早

小刁三郎 依無力座ヲ拔早

若石太郎 依無力座ヲ拔早

ケリ駒石 <sup>(文脱)</sup> 二百未進依有座ヲ拔早

正幸豕子 依無力座ヲ拔早

五郎兵衛 四斗六升年貢未進有之依座拔早

若兵衛五郎 百文之未進有之依座ヲ拔<sup>早</sup>

門 祢々 百七十文三日講未進有之ハ座ヲ拔<sup>上脱カ</sup>早

馬犬二郎 壹貫文未進有之上ハ座ヲ拔<sup>早</sup>

かゝ衛門 二百文未進有之依座ヲ拔<sup>早</sup>

若衛門入道 五百五十五文未進有依座ヲ拔<sup>早</sup>

右有与二郎 依無力座<sup>早</sup>拔<sup>早</sup>

永正<sup>元</sup>式<sup>年</sup>甲<sup>子</sup> 形<sup>刑部</sup>P<sup>二</sup>郎<sup>一</sup>三十八文座ヲ拔<sup>上三十八文</sup>早

定条々

右若於以後座ニ入輩者、未進有方々へ、料足ヲ算用有<sup>可</sup>テ、足洗酒如先々本走可有候、

右の史料は永正二年に記された前年の座抜きの詳細である。<sup>(14)</sup> 金本氏はこのM記載の一五人のうち九人が明応九年（一五〇〇）の納帳に記され、そのうち五郎兵衛、門祢々、かゝ衛門、若衛門入道、刑部二郎の五人の未進額が納帳の貢納額にきわめて接近しており、また五郎兵衛の名の下に「四斗六升年貢未進有之依座拔<sup>早</sup>」とあるところから、この「年貢」を神田年貢とし、残りの一四人の未進を同様に神田年貢の未進と考えて、先掲の神田年貢座公事という推論をなしたのであつた。

私は結論的にいつて、この神田農民座公事、神田年貢座公事という説には賛成しかねる。それは脇田氏の所論に関連して先にもふれたが、神田農民は神田畠を請けているにすぎないのである。だから神田農民は他郷民であつてもよく、また女性であつてもよいのである。たとえば明応九年（一五〇〇）の神田納帳には「へヒミソ

説  
門衛門」「ヘヒミソ馬」「今在家中茶屋」「同 兵衛」「ヘヒミソ初介」などが記され、それより九年前の延徳三年（一四九二）の納帳にも「今在家兵衛」「蛇溝介」「小今在家四郎三郎」「柴原兵衛」「小今在家道善」とあつて、その他の納帳でも他郷人の請作を指摘するのはきわめて簡単である。これら他郷民を一五、一六世紀今堀郷十禪師社の宮座構成員とする証拠を明示されない以上、金本氏の推論も覺束ないといわざるをえない。その点についてのいまひとつの疑問は、貢納額がたとえ六合であつても納入したら宮座構成員になりうるといふ論理的帰結<sup>(15)</sup>には到底賛成できない。三石を貢納するのも、六合貢納するのも、所詮それは神田畠の請作額にすぎず、座を抜かれた者が神田の請作を続行していても矛盾しない。たとえ神田畠年貢を滞納して座を抜かれたとしても、神田畠年貢座公事ということにはならない。

ではいつたい座公事とはなにかということになる。このことにかんする史料は不足しているが、これに迫るために二、三の史料を紹介しよう。

〔N〕 今堀惣定書案（改35―12 五七九）

文言之上、番者八人之長上、歳上ニツイテマわるへき物也、聊も咎人ヲ見陰番衆在之者、咎人ニ同帶たるへく候、又武者ノ差口、夫之差口、手代之番者、一和尚、二和尚未代可相除者也、是則郷内富貴家門長久爲也、衆議之趣如件、

〔O〕 今堀惣定書（改26―8 三七〇）

指置定之事

東座

一和尚

西座

一和尚

右諸公事指置申處、仍定處如件、又四人老人、武者指口除早、

長享二年戊申十一月四日

右のN・Oはその内容から惣の定書としてよい。Nは八人衆の年臈次に従って番（一和尚、二和尚）を決定すること、罪人隠匿の番衆（座衆）は同罪なることについて、老人衆のうち一和尚、二和尚は末代、「武者ノ差口」、「夫之差口」、「手代之番」の免除を衆議されているのであり、これらの具体的内容は知りえないが、Oからして「諸公事」に該当することは明らかである。Oでは、今堀の宮座は東西の二座に分かれ、老人衆の長老二人が兩座の各々の一和尚としておかれている。したがってNの一和尚、二和尚は各二人であわせて四人であることがわかる。そして、兩座の一和尚は諸公事の免除、一、二和尚の四人老人の「武者差口」の免除が決定されているのである。

以上からいえることは、惣に宮座衆には四人の老人を除いて各種の公事の負担があつた。そしてこの史料が宮座関係のものであることから、「諸公事」が座公事に該当することは確実である。前掲Gの史料において、承仕（小使、正使。恐らく神主とともに祭事に専従する者であろう）は「かうのとう」と猿樂饗の免除を定められているが、これも逆に宮座衆の負担を推測させる。また永享六年（一四三四）正月の初在家衆出銭日記（改24―26 三五五）において、初在家衆（新座衆か）は正月三日の毘沙門講立餅料足一〇文、同四日仁王会料一二文、同九日の大般若經布施、同十三日の猿樂録一二文等の負担を永享六年の一年間という期限付きで決定し、そのほかの出銭の免除を定められているが、これなども座公事としてよいであろう。門祢々の未進した三日講一七〇文も右のように考えて誤りあるまい。

座公事を未進した場合、Hにみたように、座への出仕を停止されるわけであるが、座を除外されることは、なにも座公事の滞納に限らない。すなわち、有名な延徳元年（一四八九）十一月四日の今堀地下掟書（改26—1 三六三）で明らかにする。掟書の第十六条に「家売タル人ノ方ヨリ、百文ニハ三文ツ、壹貫文ニハ卅文ツ、惣へ可出者也、背此旨ヲ村人ハ、座ヲヌクヘキ也」とある。惣で規定された経済的義務を順守しない「村人」は、宮座から除外されるのである。経済的義務には当然神田畠年貢の貢納もあり、また領主にたいする年貢公事もあるだろう。この座抜日記の場合は、明らかに経済的義務の不履行についての規定であるが、このほか宮座衆の座抜きは、犯罪にたいする罰則としても規定されている。延徳元年の地下掟書第九条にも、「惣森ニテ青木ト葉かきたる物ハ、村人は村を可落、村人ニテ無物ハ、地下ヲハラウヘシ」とあり、また前掲のLにおいても「猶以任我意人者、未代可被停止座主者也」とあり、文亀二年（一五〇二）の条々定書（改26—13 三七五）においても「右背此禁制旨輩在之者、於地下人者、出仕同座可停止、後家孤族ハ在所可撥」と規定されているのである。これらの村掟では、今堀郷の住人が、村人は地下人は座主（惣と、それ以外の「無物」の村人、後家やもめとを區別し、前者が科を犯した場合は「村ヲ可落」は「可被停止座主」は「出仕同座可停止」すなわち座抜きを規定され、後者の場合は「地下ヲハラウヘシ」は「在所可撥」すなわち郷外への追放を規定されているのである。そして今堀郷において「村人」は座衆たる条件は一五世紀末では屋敷持ちであつたと思われる。前掲の延徳元年の掟書の第一六条にあるように、家の売却には売値の百分の三を惣へ納入することが規定され、「背此旨ヲ村人ハ、座ヲヌクヘキ也」と罰則が付されているが、これは「村人」は屋敷持ちを推測せしめるものであり、また第五条に「惣ヨリ屋敷請候て、村人ニテ無物不可置候事」とあるのは、この推測を裏付けるものである。

以上の検討から少なくとも一五、一六世紀の今堀郷住人の人的構成は、宮座衆と、宮座から除外された者とは区分され、座衆は村掟に違反した場合、違反の性格によって宮座より除外された。永正元年の座抜日記の場合は、座衆の経済的義務の不履行にたいして惣がとった処置であり、その義務は多様な内容をもつ座公事や、領主への年貢、神田年貢の貢納や家売却の手数料をも含むものであると考えられる。三八文でも壹貫文でも四斗六升でも、額の多少によらず、未進の主体が座衆である限り、座抜きの対象になりうるのである。しかし、座抜きの対象となる座衆が一五人にのぼり、しかもその半数近くが「依無力」って座衆の資格を失なうという、一六世紀初頭の今堀郷の状況は注目されなくてはならない。

### 3 永正期の宮座

永正元年の座抜日記にあるように、惣が一度に一五人の退座を宣告するということは、今堀郷にとって深刻な事態であつたに相違ない。金本氏も座抜日記についての推論の中でこれにふれて「宮座の弛緩」という表現で一六世紀初頭の惣結合のあり方を問題にされた。そのさい博奕の禁制をその証とすることには、先述のように疑問を提示したわけであるが、永正期、すなわち一六世紀初頭に今堀郷の「動搖」「変貌」を推察されたことについては賛意を表したい。しかし、それは簡単な指摘にとどまっているので、ここでは変化の様相をみてゆきたい。

座抜日記は今堀郷宮座の変化の大きな兆候を示すものであるが、同じく永正元年一〇月七日の直物条目定書（改26—12 三七四）と一一月五日の直物次第注文（改20—6 三二一）があるので紹介しよう。

定条目之事直物之事

一官成者、馬飼人ハ四百文宛、余ハ三百文也、

一鳥増子者、五百文可被出者也、

一乙<sup>(丑)</sup>及年ノ当頭請人ハ、二貫御直あるへき也、

又刁年ハ一貫六百文直へき者也、

卯年ハ一貫二百文

辰年より後一貫文宛より外ハへるへからず、

一乙<sup>(丑)</sup>及年九日<sup>(頭)</sup>可為二貫者也、

刁年 一貫六百文

卯年ハ一貫二百文

辰年ハ一貫文、其後より外ハへるへからず、

一乙<sup>(丑)</sup>及年結一貫<sup>(頭)</sup>六百文宛可被出也、

刁年ハ一貫文

卯年 九百文

辰年ハ八百文、此外ハへらすへからず、

一神事急はハな<sup>(脱カ)</sup>をすへからず、

一年内老人成<sup>(カ)</sup>不成、

近江国得珍保今堀郷の「惣」覚書（仲村）

永正元年<sup>甲子</sup>十月七日

衆儀定之<sup>（議）</sup>

〔Q〕

直物次第之事

合永正元年<sup>（甲）</sup>霜月五日

貳貫文 堂頭丑年請取

道善猿衛門太郎

貳貫陸百文 堂頭刁年請取

北之辰法兵衛四郎

貳貫陸百文 堂頭刁年請取

馬五郎入道

貳貫貳百文 堂頭卯年

<sup>道音</sup>岩 福

貳貫貳百文 同卯年

三郎兵衛初衛門太郎

貳貫貳百文 九日卯年

右馬二郎

貳貫文 九日

北刁又太郎

貳貫文 堂頭

木戸脇松

貳貫文 九日

木戸脇初

貳貫文 九日

左近兵衛

貳貫文 堂頭

北駒法

貳貫文 堂頭

卯 法

貳貫文 堂頭

猿二郎せう



壹貫文	堂頭	道祐松石左衛門太郎
壹貫文	堂頭	道妙若法
四百文	ヲトナ成	中坊兵衛太郎
四百文	ヲトナ成	猿二郎
四百文	ヲトナ成	東 道金兵衛四郎
参百文	ヲトナ成	東 道心之衛門太郎
四百文	ヲトナ成	道首左近太郎
伍百文	ゑほし	太郎兵衛子
伍百文	ゑほし	介徳石
伍百文	ゑほし	藪兵衛猿
貳貫文	堂頭	茶や駒右
壹貫文	堂頭	菊太郎衛門子松千代

永正元年<sup>(甲申)</sup>霜月十日

右のP・Qをみると、QはPの規定にしたがつて作成されていることが判明する。そして官成（官途成）、烏帽子成を除いて、堂頭、九日頭、結頭（結鎮頭）は、翌永正二年を起点に三年後まで年次ごとに通減せしめ、三年を経た後はそれ以下にならないことを規定しているのである。

結鎮頭は正月四日、堂頭は正月一三日、九日頭は九月九日の神事の頭役を負担するものであり、頭役に当った者は神事の費用を分担しなければならないのになし、烏帽子成は通過儀礼的色彩が強く、村の住人として承認

される第一関門とみられ、官成（官途成）はQから老人成と考えてよいであろう。今堀郷の官座における各頭人の役割については明らかではないが、二、三の問題についてふれると次のようになるであろう。

座入りをした者は「新座輩」と称されて、一部の座公事の負担を免除され、「惣並」の発言権をもたなかったようである。このような「新座輩」が「惣並」に取扱われるのは頭役を勤仕して後である。前掲Jによれば、一四世紀末において、結鎮頭にかんして一度でも官座に出仕したことのある新座の輩は、出仕の座次に従つて頭役を勤仕すべきことを規定しており、九月九日頭についても「可准先之」とし、右の結鎮頭の規定に准すべきとしているから、新座の輩は出仕の順番により結鎮頭か九月九日頭かを勤仕することになる。なおJの末尾において、その時点で当頭（堂頭）を勤仕している者は、「依為非分頭之間」、将来順番が廻ってきたとき勤仕すべきことをも規定している。永正一三年（一五一六）二月二十八日のなおしもの日記（後5—2 六三）は五郎衛門さる等七人が各一貫の直物額を記されており、額からして堂頭か九日頭であると思われるが、この頭を勤仕した源兵衛は、翌一四年三月七日のなおしもの日記（後5—1 六三）に八〇〇文の直物を納入しているが、ここでは八〇〇文が一四人、一貫文三人、一貫三〇〇文一人が記され、この八〇〇文はPから結鎮頭と考えられる。以上の例からすると、新しく座に加入した者は出仕の順序によつてある頭役を勤仕し、勤仕の後はまだ一定の期間をへて他の頭役を勤仕するのが一般的と考えられ、源兵衛のように二カ年に二つの頭役を果す者もあつたが、勤仕すべき頭役の順序はかならずしも定まっていらないようである。永正一六年（一五一九）十一月七日の官途成直日記に、「本なおし物の日記にハ、五郎衛門初分を出候へとも、おとこのこまちよにふりかへて候て、初ハ堂の頭をつとむへし」とあり、五郎衛門の息子に初と駒千代の兄弟があつて、直物の台帳には初が官途成を果すべきことを記入し

ているが、兄弟振替えて、初が堂頭を、駒千代が官途成を行なうというのであり、烏帽子成のほかは順序が一定していないようである。頭人は今堀郷官座の各神事を行なうさいの中心的集団であり、神事費用の負担、神田畠のうち特定の神事に付属する土地の耕作にあたつた。<sup>(17)</sup>「新座輩」の座次によつて結鎮頭指しが行なわれることが明らかになつたのは、いかなる順序で頭指しが行なわれるかはわからない。しかし、Pの定書にある官途成、烏帽子成、堂頭、九日頭、結鎮頭のすべてを果すことが官座構成員の義務ではなかったか。その意味で直物費用も一種の座公事として考えてよいかも知れない。<sup>(18)</sup>

さて本筋に戻つて、P・Qの考察に入ろう。永正元年以前における直物額は、文明六年（一四七四）三月二日の堂頭勤仕人数定書（改24—19 三四八）によれば、六人が堂頭二貫文宛、八人が烏帽子直一貫文宛となつており、明応元年（一四九二）十一月四日のなをし物日記<sup>(20)</sup>（後2—3 五九八）では、一四人のうち道（堂）頭二貫文一人、同一貫文一〇人、九月九日頭一貫文二人となつており、同四年（一四九五）二月四日のなをし物日記（改24—16 三四五）では一五人のうち四一〇文の一人を除いて五〇〇文となつてゐる。こうしてみると、Pで定められたものではなく、一定の幅のある額から引出して規定したものである。しかし、頭人の資力によつて規定以上の額を負担するのは、これ以後の直物額をみても明らかであり、<sup>(21)</sup>この規定は直物のメドを示したものである。そしてこの規準から、堂頭、九日頭、結鎮頭については三年後まで通減を規定するのであり、これに則り、Qにおいては、永正四年分まで頭役を支払う意志を表わす者がおり、惣は刁年（永正三年）分の堂頭一貫六〇〇文の二人分を請取つてゐるのである。では惣が何故に頭役の年次による通減制を採用したのであらうか。この点について

萩原龍夫氏は「おそらくこの年多分に費用を必要とすることがあつて、前納を奨励したものであらう」と述べられた。私は氏の意見に賛成するとともに、加えて、一五人の座衆が「無力」や未進の理由で座を除外されるような今堀郷の現実からの惣財政の建直しの意図があつたのではないかと推定したい。なお推測が許されるならば、今堀郷が多額の費用が必要な理由は、文龜元年（一五〇二）から継起している保内商人と横関商人の深刻な御服座争論、若狭越九里半街道の争論にかんする公事費用ではなかつたか。<sup>(28)</sup>

以上のことから、永正元年に規定された直物額の通減制は、惣財政の必要からとられた策と考えられるが、座拔きの現実からもわかるように、今堀郷民のより低額での頭役勤仕の要求が、この規定の伏線とし存在していると考えたいのである。

最後にPの冒頭に記された「一官成者 馬飼人ハ四百文宛、余ハ三百文也」について考えてみたい。Pから一カ月後に作成されたQには、ヲトナ成（官達成）を行なう五人のうち、東道心之衛門太郎は三〇〇文で馬牛飼人でないことがわかる。そしてこの馬牛飼人と余の者との差別は、享徳三年（一四五四）の「人数交名」での馬衆とカチノ衆との差別に通じるものであると考えられる。すなわち、右に掲げた東道心之衛門太郎は、Eのカチノ衆の筆頭にあげられている道信坊の子であると推定され、カチノ衆の子が余の者としてヲトナ成三〇〇文を納入していることが明らかになると同時に、馬衆の筆頭にあげられている道金坊の子が、四〇〇文を負担する東道金兵衛四郎と考えられ、馬衆の子は一世代あとも馬牛飼人であることが判明する。

〔R〕 定書（改26—11 三七三）

定證狀之事

一カチニハ其一代駄荷之アツカイ不可有、背此旨仁躰ハ、惣庄に可被取、於泊市町、此挺不可相違、仍而定所如件、

卯法師

右馬五郎（略押）

四郎太郎（略押）

若衛門入道

子、左近三郎（略押）

右は年未詳ながら四人の名前から推して、一五世紀末から一六世紀前半にかけてのものと考えられ、恐らく保内商売中の規定を今堀郷に徹底させるためのもので、商業に従事するカチノ衆が生涯駄荷を扱うこと、すなわち馬匹による商品の搬送を禁じているのである。このような差別を内包しながら、カチノ衆は馬衆とともに今堀商人団を構成しているのであつて、保内下八郷のうち今堀を含む四郷<sup>(28)</sup>の定めた年未詳の条目（改26—2 三六四）に、「商買可行人者、百文宛庵室持出、帳ニ付可者也、万一不経入仁在者、為郷三百文可為各<sup>(29)</sup>」と規定され、馬衆、カチノ衆の別なく一〇〇文の納入を義務づけている。このように、一五、一六世紀今堀郷において、馬衆とカチノ衆の平等と不平等との矛盾した取扱いが存在していることは明らかにしたが、宮座内における地下中人、間人の差別的位位置とともに、今堀郷の村落構造説明のためには重要な課題となろう。

(1) 金本氏は得珍保における名体制の解体について今堀日吉神社文書中の「名」記載史料を探し、「日吉神社文書中には売券・寄進状が約二百点あるが、それらの中で『某名』の記載があらわれるのは僅かに九点である」(「中世後期に於ける近江の農村」前掲書 二六二ページ)として、一四世紀半から一五世紀半にいたる九点の例をあげ、「筆者としては、右に述べたような売券上に見られる所見は旧名体制崩壊後にわずかに残る残存物であると解釈したいのであるが、その崩壊の時期は十四世紀初頭(鎌倉末期)には遡り得ると思われ」(前掲書 二六三ページ)とされている。

私も基本的には氏の所論に賛成するものであるが、売券・寄進状の名記載の史料を「僅か九点」とされているのは誤りである。氏のあげた九点に次の史料を加えねばならない。

④ 文安三年(一四四六) 六月一七日 道妙講酒寄進状(改15—30 二三四)に「やしき分弥内名内」とある。

②享徳四年（一四五五） 参月六日 今堀道立薬師堂仏田寄進状（改15—1 二〇五）に「三百三十分へひミそ 馬太郎名」とある。  
 ③永享拾年（一四三九） 一〇月三日 盛珍菴皇亮券（改31—1 四七五）に「合卷所数十八畔者……公方カチャ名……在蒲生徳珍保内八日市南在之」とある。  
 売券、寄進状以外では、

④年未詳 算用状断簡（改18—4 二七九）に輪光房下地として「今在家左近殿名」「中野、さこく郎名」とある。

⑤年未詳 かちや名算用状（改18—1 二七六）に「カチャ名」一反と四畔の負担する公事物、公事銭額が記されている。

⑥永禄九歳（一五六六） 二月吉日 今堀郷十禅師田島年貢目録帳（改20—2 三一七）に「中野左近二郎名」一反と「同左近太郎名」四畔の公事物、公事銭額が記されている。なおこれは③⑤の「カチャ名」であることが判明する。

⑦天文二年（一五五三） 八月吉日 梅本坊御名大角豆納帳（改40 五九二）に「七郎左衛門尉計方衆」に「源兵衛名」「正輪庵名」がある。

そのほか納帳に地名化した「チャウフ名」「テウフ名」「徴夫名」が散見し、また山門の代官僧の給名と考えられるものとして「檀光房名」（改4—8 三〇）「多宝坊名入」（「観泉坊名入」（改35—4 五七一））などがある。

これらの「名」のうち、八日市南に所在する「カチャ名」は、この若干の関連史料があり、明らかに公方年貢の納入のために結ばれている「名」であり、一六世紀半には「名」としての機能を失なっていないのであって、保内における名解体の過程でなお生存する「名」をいかに位置づけるかは、今堀研究のひとつの課題となつて残るであろう。

②③ 金本正之「中世後期に於ける近江の農村」前掲書 二六八、二六九ページ。

④ たえば、永正一三年一月四日の「惣より小使方わたし日記」（改16—15 二五二）と、天正二年二月四日の「正使平二郎左衛門への渡日記」（改16—14 二五一）との「小使」と「正使」とは同じであり、神事にかんし、神主を補佐するものである。

⑤ 明阿弥陀仏ら八人を「チケノ中人、マウトノ人」とすると、かれらはその身分のために座次を下げられていることになり、宮座内部における身分制が想定される。座次が下げられることは、このほか座公事の一部未進の場合、たとえば、天文一八年二月三日の左衛門二郎請状に「太郎兵衛三日講ノ析足過分ニおい申候処、少分に御さしをき候之間、座敷各々のすへニなをり可申候」（改24—22 三五一）とあるところから判明するが、明阿弥陀仏の場合は身分によることが明らかである。しかも、この明阿弥陀仏については、明徳二年（一三九二）二月二日の左近二郎畠地売券（改32—36 五五四）の在所に「在とくちんかほういまほりの北にあり 明阿ミ名」とあって、四至にも「南ハ明阿ミ作」とあり、また応永五年（一四一八）四月二十九日の玄祐畠地寄進状（改28—26 四三五）にも「在得珍保今堀之北ニアリ 明阿ミ名」とあり、その地積から同一と判断されるが、これらから明阿弥名は一四世紀末から一五世紀初にかた

て実在した人物の名を付した名<sup>ミヤウ</sup>皇であることがわかる。そして、地下中人、間人と称され、宮座衆の中で低い身分とされている明阿弥陀仏がその名主であると考えられる。間人Ⅱ座衆Ⅱ名主という図式が、この段階の今堀郷で認められるとすれば、間人の名主化か、名主の間人化かのいずれかであろうが、いまそのきめ手はない。なお間人が直物においても天文二年のおとなの直納状(改20―7 三三二)に「モウタウノナウシ」と別の扱いをなされていることは注目すべきである。

- (6) 寛正四年十一月四日の今堀神田納日記(改38―2 五九〇)の馬四郎の請地に「一畔ヘヒミアセテノ後 大舛一斗」とあり、このアセテが蛇溝の字名なることがわかる。

- (7) 金本正之「中世後期に於ける近江の農村」前掲書 二六九ページ。

- (8) 同右 二九四ページ。

- (9) 萩原龍夫『中世祭祀組織の研究』二六一ページ。

- (10) 金本正之 前掲書 二六九ページ。

- (11) 萩原龍夫 前掲書 二五九ページ。

- (12) 穀類などの農産物を指すのであろう。

- (13) 金本正之 前掲書 二九三ページ。

- (14) それは永正式年の「式」が抹消されていることによってわかり、――の印は、式年に未進分を納入したことの表記であらう。なお若衛門入道の肩にある文字を金本氏は「長年」と読んでいるが、「丑年」の誤読であり、丑年すなわち永正式年に未進分を納入したことを記したものである。

- (15) 金本正之氏は「今堀の宮座は応永の頃より極めて開放的であった事は事実である。そして身分・階層の制約はなく、ただ座公事を納めさえすれば入座できた。その座公事とは神田農民となつて年貢を完納する事であるという先述の推論にして誤り無ければ、農民は競つて入座するであらうし宮座の成員はすべて神田納帳にその名を現わす事になる。」(前掲書 二九四ページ)といつておられる。Mにおける又太郎は、金本氏によれば、文明一八年(一四八六)から明応九年(一五〇〇)まで終始六合の神田年貢の貢納が固定しており、(前掲書 二九〇―二九一ページの表)、氏の論理では、又太郎はこの六合の貢納によつて宮座衆の資格を保持していることになる。したがって、氏の強い否定にもかかわらず、氏の論理にしたがう限り、わずかに六合の年貢未進によつて座衆の資格を失ふこととなるという帰結に到達せざるをえないのである。

- (16) 長禄四年(一四六〇)十一月一日の村掟(改26―9 三七一)の禁制事項のひとつに「ヨソカラキテ物子ゆウテ、エホシキテ村ツク」とあり、文意はやや不明ながら、他所より今堀へきた者(その子力)が、烏帽子子成(この場合、村人を烏帽子親とするのであろう)を

して村に定住することについての禁制と考えられるが、この考えが妥当とすれば、烏帽子成は、いわゆる「村人」への第一関門として差支えないであろう。

- (17) 先に引用したJに「かうか谷の神田九日頭人方可渡者也」とあり、また応安五年（一三七二）二月二日の阿闍梨源西結鎮御供米田地寄進状（改28—8 四一七）は高谷内の百歩の新田について「但彼田地者、毎年結鎮頭人付作織、廻彼以田地作毛、御結鎮可令動仕之間、不可作織一人定者也」との条件をつけている。

- (18) この点について、萩原龍夫氏がHの説明で「座公事を完納しないものは着座できないといっているのであるが、その座公事なるものは、頭人の負担や後述するオトナ成などの「直し物」とはどう違うかが一向にわからない。」（前掲書 二五八ページ）と卒直に疑問を提出されていることに同感を禁じえないのであり、金本氏が萩原氏のこの言を「座公事を、頭人負担や直物とは全然関係ないものと考えている。」（前掲書 三〇四ページ）と却下されていることについて、座公事＝神田年貢というシェーマが崩れた以上、再検討の余地が充分あると思う。

- (19) ここでは烏帽子成と記されていないが、「兵衛二郎子衾、丸」「道はん子、法師」「新兵衛子市との丸」というように「——子」と「丸」という幼名から、堂頭勤仕の人とは別に、烏帽子成と考えた。

- (20) この日記で堂頭一貫文を負担する小法師左近三郎は四〇年以前の享徳期の「商人交名」に名を連ねており、したがって同一人であるとするなら、小法師左近三郎の堂頭勤仕は最低六〇歳であると推定される。

- (21) たとえばPの卯年にあたる永正四年一月二日のなほし物之日記（改35—1 五六八）によれば、一貫五〇〇文の堂頭を負担する者が二人いる（Pでは一貫二〇〇文）し、あとは圧倒的に一貫文が多い。

- (22) 萩原龍夫 前掲書 二六三ページ。

- (23) 文亀元年（一五〇一）より永正元年（一五〇四）に至る保内商人の商業争論を列記すれば次のようになる。

◎文亀元年一〇月八日、九里員秀より保内商買中へ、保内御服商買の本座なること、馬淵市での権利を認める（改8—11 一〇四）。◎同年二月二日、左近府駕與丁等の横関下郷における御服商売を認める論旨下る（改12—21 一六一）。◎同年五月一日、建部政所直秀より保内座人中へ、御服座争論について、八日市は両方（保内、横関商人）の立合なるべきことを記す（改8—7 一〇〇）。◎同年八月一日、嶋郷秀綱より保内商人中へ、保内横関御服座争論について、保内の勝訴を申渡す（改12—24・26 一六四・一六六）。また九里員秀も同じ内容を申渡す（改12—22・25 一六二・一六五）。また同日、伊庭出羽守より保内商人中へ、去四月一四日、嶋郷市で保内商買物等が横関より没収された事件について、保内の勝訴を申渡す（改8—13 一〇六、改12—23 一六三）。◎同年九月二日、九里員秀より高嶋郡南市庭商人中へ、保内商人の若狭越荷物没収したことに付いて、その返却を命令す（改8—16 一〇九）。◎同年九月三日、



幕府奉行人、左近府駕與丁等の横関下郷における御服商売の相違なき旨執達す(改12―27 一六七)。◎永正元年二月一三日、伊庭出羽守より保内商売中へ、小幡商人の保内筏川以南における商売には、荷物の没収をもって臨むことを指令す(改7―18 九一)。

以上のように公事を有利に展開するためには、関係方面、この場合は近江守護六角氏の重臣被官に働きかける必要があった。この点を守護の領国支配の視点より取上げた論文に、畑井弘氏の「守護領国体制と座商業——六角氏守護領国と得珍保座商業の展開——」(『日本史研究』第七〇号 一九六四年)がある。氏はこの「文亀相論」「九里半相論」を、他郷商人の「特権的御用商人化を目ざした保内商人への従属を、峻烈に拒否するたたい」(二五ページ)と評価し、脇田晴子氏の批判をうけている(前掲書 五八九ページ)が、他郷との商業競争に勝つために、この段階では守護権力に連がる連中が賄賂などを贈っていることは容易に想定される。なお今堀商人惣分と今堀郷惣中の重複性(脇田氏 前掲書 五四―一ページ)が、頭役前納金の商業争論公事への流用の前提になっていることはいうまでもない。

(24) 卯法師右馬五郎は文明六年(一四七四)三月二日の堂頭勤仕人数書(改24―19 三四八)に「卯法師右馬五良」とあり、長享三年(一四八九)二月四日の今堀神田納帳(改36―4 五八八)に「ウホウシ馬五郎」、延徳二年(一四九〇)二月四日の今堀神田納帳(改36―3 五八七)に「ウホシ右馬五郎」とある。若衛門入道は永正元年の座抜日記や同年代の神田納帳にその名が見え、また子左近三郎即は大永五年(一五二五)十二月に官途成を行なっている(後5―3 六二四)し、四郎太郎もこの時期の者では明応六年(一四九七)一〇月の十羅刈奉加帳(改20―1 三一六)一〇文を奉加している者がおつて、年未詳ながら一五世紀末から一六世紀前半頃のものとしていいだろう。ただこの四人がこの証状を定めた主体であると考えられるが、老人であるか否かはわからない。

(25) (26) この四郷は下八郷の地理的な点からいって、中野、今在家、今堀、蛇溝であると推定され、その中心に今堀があり、四郷商人は今堀の庵室へ納金していたと考えられ、ここから今堀日吉神社に保内商業関係の文書が保管されている点も肯言できる。

## おわりに

以上述べてきたことを要約すると、次のようになるであらう。

まず金本氏の所論の核についての疑問である。すなわち、金本氏は中世後期今堀郷における耕地積と神田畠との比率について、検地時の地積に神田畠のそれを比べ、神田畠が全体の三分の一を占めるとされ、ここから立論

されておられるが、検地時の地積について重大な誤解があり、それは新発見の史料によつても明らかになつた以上、氏の所論の一角が崩れ去つたといわざるをえないのである。

つぎに、今後の今堀郷を対象とする村落研究や商業研究で引用されるであろう、年末詳の「保内今堀郷商人交名」の年代推定についてである。金本氏は神田納帳の人名をこの「交名」に照合された結果、黒川正宏氏の享徳期説を退けて寛正期と断定されたが、私はこの「交名」を享徳三年の「藤きり山木こり馬の人数交名」のみならず、同二年の「鹿垣日記」にも照合した結果、合致する人数は寛正期をはるかに上回る点から、また寛正期独自の名称とされた五人の人名も、独自のものでないことが明らかになつたので、享徳期説の再生を主張したわけである。

また今堀郷における宮座の確立期について、金本氏は宮座関係史料の検討を通じて、応永の後半期とされたのであるが、私は氏が引用された史料を再検討した結果、宮座確立の尺度として採用されている史料の「稚拙」性と、文意不分明とされている点については、かならずしもそうとはいえないこと、また氏が至極簡単に却下された一四世紀後期の永徳年間の頭役関係の史料は、宮座の確立が前提となつて作成されたものであることから、確立の時点は少なくとも一四世紀の八〇年代には確実に溯りうるとした。なお宮座の変質期について、一六世紀の初頭、永正期とする金本氏の説には賛成するが、その論証のひとつにあげられた堂舎での博奕の禁止条項については異論を唱えざるをえない。すなわち、氏が確立期を論証するために引用された応永三二年の宮座衆議定書の条項のなかに、すでに「勝灰」＝博奕を禁止した一条があり、この点をあげることによつて宮座の変質を説くことの不可を指摘したつもりである。

また金本氏の所論のいまひとつの核である、神田農民〓惣の全構成メンバー〓宮座衆という説については、神田納帳の農民には他郷の農民がいることからして説得性が乏しいといわざるをえない。また永正元年の座抜日記の検討について、私は氏の神田畠年貢〓座公事という説に疑問を感じ、座公事について若干の考察を試みたが、座衆の座抜きは、座公事を含む、神田畠年貢、庄園領主への年貢、家売買のさい惣へ納入する金銭などの未進にたいする、惣の処置なることを指摘した。村人としての義務の不履行が座抜きの対象となるが、この日記の場合は、経済的義務の不履行にたいする処置なることを論じたのである。そして村人〓座衆の条件として、屋敷持なることを村掟から推定したわけである。つぎにこの座抜日記と同年の一点の直物史料は連関があることを指摘し、一五人の座抜きを行なわねばならぬような現実が、直物の前納を要求したのではないかと考え、その現実とは一六世紀初頭にいたって顕在化してきた郷内の階層分化の進行と、それに加えて、文亀元年より継起している保内と他郷の商論に係のあることを推測したわけである。

以上のように、本稿は金本氏が提起された問題について、私自身も氏と同様、この問題が基礎的なものでありながら従来の今堀研究が避けて通ってきたと考えるがゆえに、金本氏の所論の検討という方法をとることによって、この基礎的問題を明らかにしようとしたのである。しかし、金本氏批判を通じて明らかにした問題は、あまりにも少なく、研究者が関心を寄せながら未処理のまま放置されている史料なり問題なりが、今堀研究の場合いかにも多いと思われ、史料の総点検が要請される所以である。